



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-0021 飯能市大字双柳94-25 Tel (042)973-2111
平成18年3月31日創刊 第2号 平成19年3月20日発行

飯能の、森と植物を観察しよう

●第2号の特集は「はんのうの森と植物」

平成17年度に、飯能市にある歴史や自然といった地域の遺産（「飯能遺産」）をわかりやすく紹介するために創刊された『はんのうお宝スポット』ですが、第2号では森と植物を特集しました。二次林

についてと、飯能市にある天然記念物に指定されている樹木をまとめて紹介します。

その他、創刊号に引き続き文化財担当職員が考える「飯能の宝物」も紹介します。今号は遺跡の発掘調査についての話です。

特集「はんのうの森と植物」

飯能市は植物の宝庫(Ⅱ)－身近にある森と植物－

文化財保護審議委員会 委員
手塚 映男

1 **はじめに** お宝スポットの創刊号で、飯能市に残っている自然林を紹介しましたが、自然林が人手によって伐採されたり、台風や火災で被害を受けたとき、その後に来る林を二次林と呼んでいます。二次林は、時間の経過とともに林をつくる草や木の種類が変わり、気候の変動などが無い限り、以前あった自然林と同じような林になり安定します。この安定した林を**極相林**と呼び、植物の種類や生え方が時間とともに移り変わることを**遷移**といいます。ここでは皆さんの身近にある二次林を中心に観察してみましょう。

2 **天覧山の二次林** 天覧山の山頂を目指して能仁寺の東側の登山道を登り始めると、道の両側に幹の直径が50cmほどもある大きな常緑広葉樹が見られます。暖温帯に多く生えるシラカシです。この木は風よけなどのためによく家のまわりに植えられていますが、その名残りでしょうか？ その近くに幹の直径が40cmほどのモミの木もあります。モミはこの奥の方にも大きなものがありますが、家のまわりではあまり見かけません。そうすると先ほどのシラカシも、家のまわりにあった木の名残りというのは疑問になります。登山道が左に曲がっ

て少し登ると、道の両側に、高さが2m以上にも伸びたヤマツツジがたくさん出てきます。この辺りの道の北側に少し入った所にコナラ、ヤマザクラ、イロハモミジ、それに大きなアカマツなどの木を観察することが出来ます。コナラは知っている方も多いと思いますが、大きなドングリのできる木です。これらの木はいずれも二次林に多い木なのです。しかし、アカマツが何となく元気がありません。よく見ると、まわりの木の葉が茂ったところには枝は枯れてありません。後から伸びてきた木の枝と触れあって日が当たらなくなると枯れてしまうのです。マツは二次林の早い時期に林をつくる木といわれています。では、このあたりには昔はどのような森があったのでしょうか？ それを考える前にもう少し登ってみましょう。間もなく中段広場に出ます。話はちょっと横道にそれますが、ここから山頂への登り口の手前に、大きな針葉樹で葉のつき方に特徴のある木があります。コウヤマキで、この木は、世界で日本の高野山などだけに生育しています。このような植物を**固有種**といいます。竹寺にも幹の直径が約110cmもある大きなものがあり、飯能市では天然記念物に指定し保護しています。

3

天覧山の極相林

広場から登り始めると道の両側に前回紹介したスダジイの森があります。範囲はあまり広くないですが、高木層を占めるスダジイは幹の直径が60cmほどの大きなものもあり、アラカシやシラカシの大きな木もいっしょに生えています。林内は暗く、低木層は人手が加えられているようですが、スダジイやアラカシの幼樹のほか、ヤブツバキ、ヒサカキ、草本層にはヤブコウジ、マンリョウなどこれまでと違った種類が多く見られ、この地域の極相林の様子を示しているように思われます。このような森は、飯能付近ではもうあまり見られません。この森から考えると、これまで観察してきた所は、昔はスダジイやアラカシ、シラカシなどが多く茂った森だったことが考えられます。入口付近にあったシラカシやモミの木もその一部だったことも考えられます。それが山火事か、あるいは切り開かれて、そこにアカマツを植えたか、または生えて二次林が出来はじめ、そこにコナラなども生えて成長し、現在のような遷移の途中の林に移り変わってきたことが考えられます。

4

天覧山のアカマツ林

登山路を登りつめると、山頂の北西側のかなり広い区域にアカマツの見事な二次林が見られます。日当たりが良い所なのでアカマツの高さは20m以上に達していると思いますが、やはりその下には、コナラやヤマザクラ、イロハモミジなどが追いかけて成長しています。けれども高さは10mぐらい

までで、マツの枝はまだ上の方に残っており、マツ林の状態を保っています。しかし本数は少ないようでし、後を継ぐ小さなマツも見当たりません。もし、台風などで倒れたら、この場所はコナラなどの多い二次林に遷移するように思われます。林内はスダジイの森より明るいので、ムラサキシキブ、アオハダ、ヤマツツジ、オトコヨウゾメなど、また、草本類もヤマユリ、チゴユリ、ノコンギクなどたくさんの種類を観察することができます。

5

二次林は豊かな森

二次林には、地形など環境の違いによって、クヌギ、クリ、イヌシデ、エノキなどの木や、草は季節によってスマレ・ラン・キクのなかまなどたくさんの種類が出てきます。例えばハンノウザサで知られた見返り坂から多峯主山に登る坂道のあたりにはイヌシデなども多く、春には新緑の美しい二次林が見られます。また、二次林には鳥や昆虫も多く、場所によって雑木林、里山とも呼ばれ、昔から人々の生活と深い関わりを持ってきた林が多くあります。最近では緑の保全、生物多様性の持続などのために価値が見直されています。飯能市は森が多だけでなく、場所によって生えている木や草が異なり変化に富んでいます。皆さんの身近にどのような二次林があるか、木や草の種類だけでなく、高木層や低木層にはどのような種類が多いか、天覧山の森などと比較しながら観察すると、きっと、新しい発見があると思います。



天覧山山頂付近のアカマツ林



①子の権現の二本スギ(県指定)

標高約600mの山頂にある天龍寺(子の権現)の山門外に、南北に立つ二本の大杉です。樹齢推定800年です。初めて山に登った子の聖が地面にさした、二本の誓が根付いた霊木と伝えられています。



②南川のウラジロガシ林(県指定)

標高約380mにある大山祇神社^{おおよまづみ}の裏側の東向き急斜面にあるウラジロガシとツクバネガシが混じった林です。紀伊半島や伊豆半島などに見られる暖温帯の常緑広葉樹林が、飯能のような内陸部にあるのは珍しく、貴重な林です。



③高山不動の大イチョウ(県指定)

標高約600mにある常楽院(高山不動尊)の境内にある大イチョウです。樹齢推定は800年で、幹からたくさんの気根が垂れ下がっており見事です。この気根を乳房に見立て、母親が育児のときに母乳が良く出るように祈ったことから、「子育て銀杏」とも呼ばれています。



飯能の 代表的な木々

(県・市指定天然記念物)



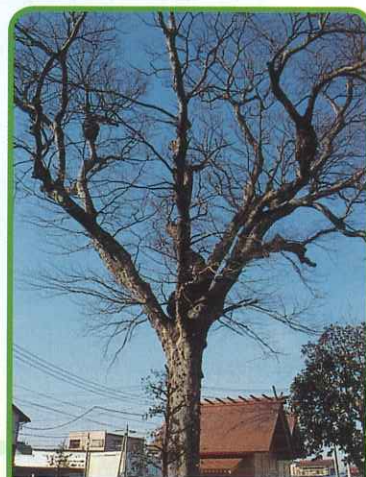
④竹寺のコヤマキ(市指定)

標高約490mにある八王寺(竹寺)の境内にある大きなコヤマキです。コヤマキは日本にしか見られない貴重な植物で、竹寺のコヤマキは樹齢推定400年の巨木です。太田道灌が植えたといえられ、「道灌榎」とも呼ばれています。



⑤滝の入タブの木(県指定)

富士浅間神社裏山の標高約275mの斜面にあるタブの木です。樹齢推定700年です。タブの木は日本では本州南部・四国・九州に多く見られ、滝の入タブの木は巨木であるとともに、タブの木が分布する範囲の中でも最も北にあり貴重な木です。



⑥飯能の大ケヤキ(県指定)

加治小学校の北、神明神社の境内にある大ケヤキです。樹齢推定700~800年で、まっすぐ伸びた幹から枝が四方に広がる様子が見事な巨木です。ケヤキは武蔵野の田園風景の中で代表的な木で、埼玉県の県木になっています。

縄文時代のしょっぱい話 ー熊坂遺跡の製塩土器ー

1

熊坂遺跡でのちいさな発見

平成17年の春、飯能市川寺の加治橋のそばで縄文時代の遺跡の調査がおこなわれました。この遺跡は熊坂遺跡という、縄文時代もおわりに近い後期～晩期中頃といわれる時期のムラの跡です。

この熊坂遺跡の調査中ちいさな、しかし重要な発見がありました。たくさんの土器にまじって、もようもない薄い土器のかけらが土の中から出てきたのです。一見なんの変哲もないちいさな土器のかけらがなぜ重要なのかみていくことにしましょう。

2

「塩づくり」の土器

みなさんの食生活に欠かせない「塩」、日本ではいつからつくられたか知っていますか？じつは縄文時代の後期終末～晩期中頃、当時まだ海の一部だった霞ヶ浦で塩づくりははじまったのです。

縄文時代の塩づくりは、土器で海水を煮詰めて塩の結晶をとり出す方法だったと考えられています。塩づくりにつかわれた土器を「製塩土器」とよんでいます。その特徴は表面をけずって仕上げる、もようのない薄い土器でした。そう、熊坂遺跡でみつかったかけらはこの製塩土器だったのです。

3

海の味 ー塩の風味ー

製塩土器の存在は飯能の縄文人が「塩」を手に入っていた証拠といえるでしょう。しかし熊坂遺跡で直接塩づくりがおこなわれていたとすぐに考えるわけにはいきません。なぜなら飯能には塩をつくる原料の海水がないし、製塩土器はわずかな量しかみつかっていないからです。つまり熊坂遺跡の製塩土器は、塩づくりをおこなっていた海辺のムラから塩とともに運ばれてきたと考えられるのです。

塩は食物を保存するためにつかわれた可能性もありますが、もともと自然には塩の結晶が存在しない飯能周辺ではそうした生活必需品としてではなく海の味、つまり塩の風味を味わうための役割が大きかったのではないのでしょうか。塩味の効いた食べ物は飯能の縄文人にとって、普段は味わうことのできない特別なごちそうだったことでしょう。

定住のはじまった縄文時代ですが、ムラのまわりの資源だけでなくたとえば信州や伊豆諸島から石器づくりの材料が運び込まれているなど、遠くはなれた地域の物資も何らかの方法で手に入れて積極的に利用していることが知られています。

このように製塩土器＝塩という視点で考えていくと、熊坂遺跡の製塩土器からは、縄文時代のおわり頃に海の資源が塩という結晶のかたちで、縄文人のネットワークによって運ばれていた可能性が考えられるのです。

また、ほかの可能性としては、製塩土器はほかの土器にくらべて熱のまわりが早い特徴をもつため、塩とは関係なくこうした土器自体を熊坂遺跡の縄文人が必要としたのではないかとする別視点の考えもあります。

4

遺跡はおもしろい！

遺跡や遺物（土器や石器など）は縄文人が身のまわりの環境へはたらきかけた方法を教えてくれます。こうしたものを通じてわたしたちは飯能の土地や自然に根ざした縄文文化とはどのようなものだったのかをさまざまな視点から検証できるのです。熊坂遺跡の製塩土器は今後さらなる分析が必要ですが、ほかの地域との関係や縄文時代の食文化を知るうえで重要な発見といえます。遺跡にはこうしたちいさな発見が無数に埋まっているのです。だから遺跡はおもしろい！



熊坂遺跡からみつかった「製塩土器」のかけら

土器の表面が薄くはがれていたり、つよい火で赤やピンクに変色していることも塩づくりにつかわれた痕跡と考えられています。

背景写真：霞ヶ浦の製塩土器 土浦市上高津貝塚出土
（上高津貝塚ふるさと歴史の広場発行 『内海の貝塚』より転載）